文より引用させていただいて拙文を終らせていただきます。「1970年代に入ってからの世界的ともいえる女性問題の提起は，女性史学の進展にあらたな活力をあたえた。（中略）それが歴史の見方について，ひいては世の中全体に何らかの転換をせまる起爆力を内包している。」　（8回生）

青　春　の　庭

太田晴子

私は，現在百科事典関係の出版社に勤めている関係で，母校を訪れる機会が割合に多いといえるかもしれません。なかでも地理談話会は私自身の勉強のためと，先生方をはじめ先輩や後輩の交歓の場となることを望んで，いつも心待ちにしております。しかしながら実際は，時間に追われて会が終るとそそくさと家路に急ぐのが常でした。それにいつもは私たちの学生時代にはなかった文教育学部本館の方から出入りし，その7階から広くなった母校を眺めるだけで，往時とひき比べある種の感慨こそかすかに胸の中に湧き上ることはあっても，遠い学生時代の一こま一こまを思い出すということはありませんでした。

1月も半ばをすぎたある土曜日，式先生の話を楽しみに談話会に出かけました。ところが折悪しく亭主の都合がつかず，4才の次女を連れて出かける破目となりました。足手まといの娘を叱咤しながら都電通りの門から入りました。昔と少しも変らない門と裸の銀杏並木，窓わくの少し大きくなった本館など古色蒼然としたたたずまいがふと私の足を止めました。「ここはママの学校よ」と子供に言い聞かせつつ私にとってまさに「青春の庭」である芝生のキャンパスへと急ぎました。中学校に通じる道との曲がり角の掲示板には，「海外研修旅行」や演奏会のポスターが目につきました。そのポスターとポスターの間のよごれをはがした跡から，60年安保の頃の集会ビラや原書講読会のビラが浮び上って来ました。そしてくすんだ掲示板からは未知に対する恐れと青春の迫力のようなものが感じられてくるのです。

理学部の建物の前にもう一棟同じような建物が建築中でした。かって「山の上」と呼んでいた所には学生会館があり，かってはモダンな建物であった学内寮はうす汚れ哀れをもよおしました。でも護国寺の杜の眺めは少しも変りません。遠くに白い超高層ビルが一つ見えるのを除けばあの頃の風景です。芝生に坐っておしゃべりをした頃のざわめきや頬をなでる心地良い風の感触，護国寺の森が暮れなずんだ頃そのまわりを埋める街の灯がすぎ去った長い時間を消していくのでした。

高い煙突のついたコンクリートの建物…　かっては食堂であったのが今はクラブハウスになっているようです。ここのカレーライスは黄色いえのぐのようで，お醤油をかけて何とか口に入れたものでした。

横の学生会館の芝生でラケットを振っている学生達，本館の前でみかけたランニングをしている生徒達，皆栄養満点のはちきれんばかりの身体つきをしています。その若さにはこちらを困惑させるような眩しさがあります。

図書館　…　これは確か私が卒業するころ学生会館と一緒に出来ていたのでしょうか。今は出入口

が西側についていますが，かっての記憶と混乱してしまいそうです。そういえば新しい図書館で北海道一周旅行の計画をたてたのでした。梅雨のない北海道の旅行は６月に限るということで，夏休み前１週間の講義の休講を式先生にお願いし，強く拒否されたときのショックは交渉した３人皆同じだったと思われます。その処理はどうしたか忘れました。　　（１０回生）

琴の音に想う

青木和子

初春の調べにふさわしく母の弾く琴の音が静かに流れてきます。その美しい響き（弾き方でなく音そのもの）に５０年以上も昔の少女時代をなつかしむ心があるのです。というのも，その琴は母が当時弾いていた物であり，つい２ケ月前までは，母の実家の蔵の中に埃をかぶって置きざりになっていたのでした。

その蔵を壊すという事で中を片付けていた際にみつけたものであり，長い歳月で糸は切れ，脇板も少し裂け，虫食いもあるという有様でした。ただ捨てるには勿体ないので修理に出したところ見事若返り元気な姿でもどってきました。半世紀もの長い間，暗い蔵の中で，じっと耐え，ようやくここに，また日の目をみることになったのです。もし私達が無視してしまったら，そのまま消え失せてしまったかもしれず，そう思うと，見えない糸でつながっていたものと不思議な想いがします。こういう事を思うのも，この５～６年外国へ旅行し，あちこちの家庭（主に米国，豪州，欧州等）に滞在し古い物を大事にする習慣を知ったからです。例えば，パース（豪州）のＪ家では，家具から日常品まで祖父母の物を，家の宝物として大切に使っています。一緒にピクニックへ行った時，大きなバスケット，食器，水筒等ほとんどが，歴史的代物？には驚きました。日本でしたら，古臭く，みっともなくて恥ずかしいとおもい，また逆に皆から冷笑されそうな感じですが彼等は平然と，いやそれよりも誇らしげに使っているのです。お金では買えない彼等の祖先の人々の想いが，そこに宿っているのでしょう。そして，それらが次の新しい世代へと受け継がれていくのです。それにくらべて，私達の生活は，どうでしょうか。

我家に帰り周囲をみまわし，その相違に驚くばかりでした。何と物を粗末に扱ってきた事かと，何かなさけない気がしてきました。

我家で唯一の歴史的代物は祖母からの古いオルガンでした。子供時代，ピアノの練習に使っていましたが，ギィーギィーとペタルのきしむ音がして親にピアノを買ってとせがんだものです。多分経済的事情でしょう。そのまま買わず仕舞いで，今日まで，そのオルガンが我家に鎮座ましましているのです。どういうわけか古くてオンボロにみえたオルガンに，急に後光がさし風格あるものに見えてきたのです。おかしな事に，その後，我家を訪れたアメリカの夫妻に誇れた最高の物は，そのオルガンでした。まさしくコペルニクス的転回でしょうか。

新年の事始めに，私もこの優雅な音に魅せられて，琴を習い始めようかと思います。上達のほどは，コトのなりゆき次第ですが……　昨年フランスのリモージュでお世話になったＡ家のＣ嬢が，そのう